

# 「相対的貧困」理解を

## TVで困窮訴えた生徒に批判

### 飢餓と異なる深刻さ

子どもの貧困問題を扱ったNHKニュースで、困窮体験を語った女子高生に対し、インターネット上で「貧困とはいえない」などと批判が相次ぐ騒動が起きた。貧困家庭の出身者や支援者からは「飢餓に苦しむ人が直面する『絶対的貧困』とは異なる、日本の『相対的貧困』の深刻さが理解されていない」と深く憂慮する声が上がっており、東京では「貧困叩きに抗議するデモ」も行われた。



騒動を巡り、東京都内で行われた「貧困叩きに抗議する新宿緊急デモ」= 8月27日(矢部真太さん撮影)

ニュースは8月18日夜放送。神奈川県が設置した「かながわ子どもの貧困対策会議」のイベントで発言した女子高生を取り上げ、経済的理由で進学を諦めたという厳しい生活ぶりを紹介した。だが放送後、漫画やイラストが趣味とみられるこの生徒の部屋を映したニュース映像や、会員制交流サイト(SNS)上の情報を基に、「本当に貧困なのか」「趣味を我慢したら進学できたのでは」などの疑問がネットに流れ始め、本人の個人情報暴露し

て中傷する者まで現れた。

騒動は、困窮世帯の出身者に衝撃を与えた。奨学金を借りるなどして東京都内の私立大に通う女子学生(19)は、趣味にお金を使うのが貧困でない証拠のように論じられたことに「貧困だと、文化的にも精神的にも豊かになることを許されないのですか」と嘆いた。「私には『奨学金で学校に行くなら、勉強とアルバイトだけしていればいい。サークルに入らず、身なりを気にせず、目の前のことを精いっぱいやっている』と言われるのと同じです」と憤る。騒動の背景を武蔵大の菊地英明教授(福祉社会学)は「多くの人

が旧来の貧困認識から脱皮できず、今の日本の貧困とは何かを理解できていないため」とみる。「ニュースで貧困の定義を丁寧に紹介することも必要だったのでは」と指摘する。貧困には、生死の境にあるような状態を指す「絶対的貧困」と、当該の社会で普通とされる生活ができない「相対的貧困」がある。日本の問題

は主に後者で、子どもの約6人に1人が今、この相対的貧困に陥っている。貧困による格差を解消する教育支援に取り組む公益社団法人「チャンス・フォー・チルドレン」代表理事の今井悠介さんは「相対的貧困は時に大きな精神的ダメージになる。絶対的貧困よりもまし、ということではないのです」と注意を促す。

特に顕著なのが、子どもへの影響だ。貧しさゆえにできないことが多く「傷つかないために『どうせ、僕なんて』と何事も諦めるようになってしまう。諦め感を持ってしまった子どもに、意欲を再度持たせるのは難しい」。それが学習や進学、就職にも響く。菊地教授は「相対的貧困は周囲に見えづらいからこそ、奨学金など公的制度のサポートが大切。政治や行政は、子どもが人生の選択の幅を広げられるように制度設計しなければならぬ」と話す。

ないことが多く「傷つかないために『どうせ、僕なんて』と何事も諦めるようになってしまう。諦め感を持ってしまった子どもに、意欲を再度持たせるのは難しい」。それが学習や進学、就職にも響く。菊地教授は「相対的貧困は周囲に見えづらいからこそ、奨学金など公的制度のサポートが大切。政治や行政は、子どもが人生の選択の幅を広げられるように制度設計しなければならぬ」と話す。